

劫外道空	一運玄勝	實山良樹	得翁祖善	堅外良忍
大應定肝	洞水隨流	要山玄機	諦翁良聽	養真機道
篤運了學	寰齋玄中	顯道悟宗	大道常明	單外默傳
魯山靈純	仁岳俊勇	淨覺智仙	獨峰自尊	遠山惠通
實堂元理	一關全越	實參玄性	寒巖道容	瑞巖良運
寒山素光	格運超宗	道鑑義仙	古岩真道	岷山懿玉
大法篤問	獨山玄雄	有道默隣	默峰亮禪	默堂良說
碧溪慈雲	白道慈泉	天巖壽光	無相量參	回庵亮天
大法竺仙	因山良果	歸嶽良真	直入玄門	孤岸自涼
禪海真龍	雪江真釣	玄道默旨	真齋怡源	晚山智香
籌山道逸	義岳明倫	安山道泰	大光正道	節相義徹
虎巖玄威	天外智應	顯山義雄	德峯俊章	鐵翁觀山

文軒良章	瑞應東光	喚三了悟	頓了一夢	安山良住
祖燈明英	玄亭惟用	竹堂清節	實學淨秀	清山良準
一路超玄	月光良潭	梅翁保薰	露岳玄堂	乾門良堂
桃雲長蹊	實庵常果	鐵山一牛	冷雲高冲	豪山義英
天瀛靈純	歇堂是關	素山大琴	慈航良濟	披雲良懷
天山道休	默山超宗	慈安德門	退庵真讓	大安雄賢
利山義通	廓然浩道	鐵山瑞光	理安英哲	春峰良甫
嘯月清韻	凌雲令節	秋水彌天	義峰哲雄	普門覺照
明山爲證	清岸觀流	玄透義關	篤忠成仁	潛翁白龍
祐晏清通	全宗玄提	本岳養源	觀性即中	孤舟良涉
天山不白	荷岳良擔	夢外徹宗	義山有節	泰溪良運
雷翁默禪	岫峰靈雲	鐵山大舟	穆翁道恭	最雄寂玄

元道宗來	孤月玄溪	鶴翁良壽	一溪覺音	靈光常鑑
玄翁宗關	大庵振道	觀峰泰宙	巨巖道椿	寂山閒堂
學海智成	天運智算	實翁傳心	是山玄了	寂水如真
桃嶺良英	石窓全輝	劫外長安	孤峰悠心	本覺永證
寂澗清潤	巨嶺良柏	桂林本香	實山宗茂	善了達心
壽窓清德	洞嶺良天	古道宗參	吉山俊祥	智林淳正
大放耕牛	初岳揚光	蘭山天秀	摧庵鐵染	聰岩明達
泰勝機賢	久巖嶺松	養德乘運	法運了慧	天祐義統
禪洞知芳	寂晏心海	大乘寶車	大同徹心	曦山道光
海心釣月	直翁正道	至寶道珍	德岩道充	祖峰玄心
竹溪良響	槐岳宗茂	休月心光		

第三 優婆夷

德光貞順	觀相良月	蓮臺妙性	顯室妙教	玄崖妙參
連山妙雲	壽室賢康	大應妙義	榮林妙昌	竹窓貞節
安室惠穩	富岳順永	白室妙雲	瑚室妙珊	玉質貞珠
禪室貞戒	娥山貞眉	法相妙惠	寶光自照	信源貞性
達玄妙通	安山貞住	功德妙讚	靜室安信	實相貞參
默音妙提	真相妙室	松操貞柏	英林貞俊	月窓貞心
喜見祥瑞	安詳妙樂	智圓妙定	實參真相	心操妙然
廓室諦然	松林貞操	登覺智蓮	證運貞明	靈質妙光
純忍妙戒	松室貞壽	保山貞仁	忍法貞戒	慶雲貞祥
玄質貞壽	壽峰妙仙	智山妙惠	梅園貞薰	淨戒妙芳

玉林清光	法室貞範	祖林貞鏡	謙室智讓	松操貞翠
欣室妙祥	慈法妙祐	松岸貞操	慈航真運	心室智鏡
寶蓮妙開	瑞林妙祥	無相妙圓	大乘妙心	竺窓妙仙
佛海妙音	長山妙久	椿山真壽	淨月智鏡	久山永昌
默室妙真	繁林妙榮	順操淨戒	連室妙城	觀山妙瑞
禪戒妙宗	洞雲妙禪	圓光智照	成功智德	禪室惠定
誓願妙念	清室妙誠	花岸真壽	溫室良惠	溫室惠淳
淨芳慈戒	輝山真真	智外妙惠	格法智順	英質妙容
月相貞光	覺相顯壽	玉質永照	花岸良馨	深海良信
長樂妙證	泊岸祖舟	鶴峰妙年	松林真壽	智峰順貞
永室清壽	智光真照	光岸妙清	涼月仰顏	了庵妙心
智海慧舟	玉室妙振	無等惠倫	和顏真質	孤月貞光

壺月妙中	巢雲貞鶴	古月妙臨	觀室妙光	清室妙淳
梅窓陽傳	寒岸智月	清雲惠涼	戒圓真法	玉芳妙艷
月皎涼白	惠運光然	巍高妙然	仙室靈壽	玉顏妙容
玉相智線	天質昌壽	松質貞林	南翠妙薰	覺乘妙船
本室妙智	心溪自法	仙齡惠嚴	月澗惠照	妙溪良雲
和顏妙悅	絃外妙調	華嶽妙開	古室妙秋	惟心全貞
冷天妙清	慈岳貞忍	明室顯光	隨應貞節	靈臺妙照
槐室妙本	寂相唯然	雪溪梅香	蘆岸皓月	永室自圓
月桂珠圓	齡祥真壽	祥雲妙禎	寬相妙真	奇雲妙臺
自修貞善	愛蓮淨薰	容室妙顏	潭底妙照	落紅妙案
覺心智定	玉楓妙紅	桂巖成香	禪順同光	瑞室如仙
梅庵雪香	善萼惠馨	端然常相	淨戒貞操	桂室妙馨

梵庭智音	潔身妙皎	蓮身生臺	幹室貞翠	春林晚芳
麗運妙質	常質妙空	實聞智修	清相白凜	華林良月
春林梅光	慈音貞觀	解光妙脫	專室良稱	妙心智覺
蓮貞淨芳	玄室貞唱	靈皎妙源	青蓮智香	慈光貞存
青楓妙葉	雪淨心香	樂邦真月	霜屋貞幹	宗林妙鏡
清室淨香	成安智現	探戒智玄	皓室涼然	丹臯妙鶴
秀峰智苗	觀相惠光	超禪智宗	延山貞壽	禪底智參
廓室妙然	慈室妙雲	仙岸智芳	貞林智節	保山貞壽
圓鑑貞照	奇雲貞峰	自圓妙性	照室貞光	實相淨心
大圓良鏡	華山淨月	盛室貞昌	繁室良昌	榮林貞繁
貞光慈麗	觀室妙照	琴室良調	圓臺良鏡	桂室妙香
要室貞津	月海明輪	玉操良輝	靈室貞光	大圓妙空

明惠海心	心月智光	演外貞說	本空通光	直心妙指
即應妙心	智月妙光	德相智光	實相良參	法林妙華
全底智月	松林貞繁	月峰妙圓	錦楓貞林	祖芳妙印
蘭庭惠秀	孤溪妙芳	天室妙性	孝庵智順	法雲貞性
德室壽昌	德海貞潤	心月珠泉	法相貞印	永室妙壽
賢室貞聖	梅岸常薰	本相貞源	秋林妙貞	旭輪智映
心安淨悟	月光妙照	心月清光	繁室貞昌	諦室妙觀
溫室妙惠	戒室貞光	定室惠戒	積操妙善	玉室貞光
玉照淨光	覺性妙悟	清海貞鏡	標月拈準	演法淨說
松操貞耀	桂岸天秀	溫光貞良	梅岸清薰	感光妙應
德室妙功	薰臺妙華	智月貞順	桂雲智月	龜岳貞壽
顯崖貞光	本性智溫	祥雲智瑞	靈室智源	貞林妙操

戒室壽源	南峰智清	寶城真投	妙顏容奇	中城容化	大莖妙華	惠林智朴	蕙芳貞薰	曹涯妙溪	清質善器	鶴室妙壽	珊月珠煥
智戒良慧	皆從妙緣	掌花妙舞	默契妙心	戒本妙光	保室真壽	慈戒真光	純質妙貞	壽安貞命	梅園貞香	法林智榮	鏡光貞照
紫岳真雲	禪相智定	柏雲紅樹	竹溪妙絲	專應妙泰	見覺智性	奇芳裕薰	正室相傳	光與明照	天籟妙調	淨應真忍	皓雲冷月
圓明貞照	祥眼成光	法蓮妙海	一闌妙開	甘露天如	隨緣順清	不傳妙可	寂光妙圓	桂林自芳	精光貞進	靈岳妙珠	雲月映犀
榮顏妙壽	本相智溫	真淨慧眼	洞觀惠然	雲裳妙花	幻垢稱無	靈外惠苗	蓮室淨華	寶室智鏡	葆全秀光	湛光妙然	寶海真珠

圓林淨通	秀山貞節	慈雲妙心	靜觀妙法	安室妙心	教屋理順	金閨智仙	賀雲妙慶	傳室貞心	良溫安清	荷相妙香	清窓妙淨
天外智真	松庭妙壽	謙室慈仙	松山貞操	心月普照	唯觀妙誠	皆順真法	松室貞樹	成黛壽隣	海屋妙容	禪海貞瑞	淨室圓明
天曉順真	松月智影	祥麟貞瑞	春柳貞絲	梅林貞香	覺本智臺	梁室柔貞	心寶提印	玉相壽英	清室立光	心操智順	真月妙珠
皓月妙光	徹參妙道	禪岸智定	孤山淨圓	福芳貞貴	文林智璨	圓明智性	秀岩貞松	欣室妙然	玉雲智妙	壽孝妙量	玄室貞妙
觀山妙樹	月山智玉	寶山見珠	大應智舟	壽屋貞仙	觀山常念	祥山妙章	荷水妙葉	歎室惠讚	玉寶妙珠	翠顏妙黛	寶室妙珠

性海妙空	智環連峰	寂照圓光	密參妙機	晴雲妙鏡
活宗妙機	嶺雲妙松	圓明智覺	忍德惠戒	觀相惠光
禪底智參	廓室妙然	圓鑒真照	照室真光	桂室妙香
直室妙指	德相智光	天室妙性	一陽妙春	梅室占春
春光妙融	心耕妙田	佛海妙音	虛室真空	空室智鏡
桃林妙悟	無相妙心	竹外貞香	大安妙機	貞室智操
新豐妙穎	天真妙機	清縫貞襟	寶海妙藏	溫顏妙容
寂然妙湛	天室自然	清節常馨	鏡室真粧	貞岸令節
心室妙眼	默然智定	默室真性	隨心妙喜	端室淨嚴
傳來智心	本源妙有	仙洞真壽	蓮窓淨香	柏岩真壽
梅岳妙蕊	貞室和順	秋林妙葉	妙心涼花	心光妙清
梅薰貞樹	照應皎月	賞月慈念	普聞妙香	閒月清空

普月智報	春山妙覺	惠風貞順	智法妙薰	芳玉智貞
真觀妙性	普行道暉	本性了薰	廓月徹心	有善惠光
柔順靜節	普光圓心	慈雲妙操	德光永壽	桂林貞光
智月義光	霜岸智英	清月淨和	一法開心	清薰貞證
貞節智賢	澄觀智性	慧光明照	皎月妙薰	崇月智仁
芳顏妙香	覺法智念	超月崇順	順忍真鏡	節操良心
超界清倫	智光淨心	實峰妙玄	實安妙傳	貞室慈薰
蓮臺自芳	善戒定柔	觀窓妙桂	風葉清薰	海光貞印
實運妙參	光室明瑞	清鑑妙蓮	廓然慧明	禪月清光
悟雲貞觀	一乘妙帆	天室長壽	鶴壽永船	明室惠鑑
碧潭淨月	松樹妙吟	寂園妙遊	素岑了白	繁屋貞松
怡山妙悅	凌霄慧雲	荆山淨玉	徹參真笑	皎月貞心

妙室慈眼	隨芳惠心	瑤林慈幹	寂室賢光	天真妙覺
實應祖真	輝雪涼光	清潭光月	圭雲慧光	梅藥芳心
亮光智月	海寂妙音	純琳貞白	歡室妙心	真相妙源
天相妙山	清室是霜	壽岳淨延	華林妙詠	珠林妙珪
全岩白貞	體廣妙相	傳心妙授	唯心妙觀	松室理順
春岸淨英	快岩智達	天苗靈繁	無相妙心	仙巖妙壽
松嶺貞性	幽光淨玄	瑚海智珊	松室貞琴	單提妙傳
香岩淨心	慧觀妙空	淨刹妙信	清室妙香	椿窓仙榮
貞雲玄教	天窓惠裕	梅苑淨萼	秋岸玉蓬	春江妙波
春阜聯芳	桂月昌光	惠室淨心	智證元心	芳室善英
祥岸壽真	心室淨安	紫岩妙金	夏月淨天	圓月桂宗
海容常晏	松屋翠光	觀參妙經	圓體妙融	見光智性

松屋壽光	瑞室理祥	純相了順	心光清玉	即心妙應
圓室皎輪	戒山妙宗	長應貞久	靈臺妙運	松操良華
雪岸妙林	靈覺智宗	朴室妙容	鑑室清圓	春庭妙光
玉樹貞林	一相妙庵	金針玉線	光室靈明	總林妙持
明室智鏡	貞園智苗	觀月靈明	春月貞融	心月惠照
了蘊惠性	慧室自明	觀法妙念	仙顏智香	放雲淨月
圓相宜觀	寶光良鑑	露含貞薺	月桂妙泉	本光真瑞
智光妙盛	玉顏純光	壽谿貞圓	空海妙真	仙室妙麟
蓮邦妙香	種性真善	壺天妙仙	月鑑澄圓	春庵淨芳
妙清傳心	榮岸智順	壽谿芳椿	雪江惠照	澄觀妙性
量圓智得	探月妙藥	池蓮淨涼	古靈明鑑	皎月智璋
真路妙還	得相妙雲	蓮室常香	壽山寶林	涵江心月

天岸智籟	白日流銀	光山靈芸	是法承順	春塘妙薰
操屋貞幹	蘭庭妙芳	貞覺鏡參	明鏡慧性	蘭窓妙馨
梅臯素鮮	寂岩幻光	真月清觀	卓應慧然	月光妙映
寒江珠泉	簾外珠光	禪室妙定	玄安妙要	守操貞柏
清菌自薰	玉室知明	梅岸淨心	春光淨澤	珪岩光樹
潮音理運	清蓮淨戒	月窓涼影	月舟凌仙	覺源妙舟
梅境惠芳	月窓淨庭	楞室妙嚴	鳳顏貞瑞	松軒妙翠
華窓妙柳	丹桂壽仙	真質貞本	華屋常香	南窓自薰
瑞岸永祥	潭底瑩月	永月妙圓	玉藻妙機	定室妙量
瑚海妙琦	寂照元明	冰月妙懷	雲外貞秀	月岑自照
安宗妙穩	松操貞樹	本覺妙真	月璨妙珠	玉峰真潤
松屋永壽	善餘妙慶	大槐夢覺	玄室知方	妙聰惠玄

真光妙運	花林慈葉	觀室持光	菊庭妙藥	天岩妙雲
寒庭智霜	性海月船	善戒貞順	桂芳心月	慈岸到航
丹嶺壽光	梧州瑞鳳	天月涼光	慶雲妙光	縵州貞隆
智教妙證	寒藥珠香	智月光襟	千江妙月	清室淨光
褒林貞讚	藏海妙量	玉潭觀光	霜節貞明	德祐自盛
翠臺妙樹	清澗徹底	離相妙體	行雲貞西	霜庭智月
月山理光	真宣法淨	說一華屋妙桂	晴雲淨春	誓岸慧舟
澗月蒼龍	正質幻貞	心光妙映	誓海慈帆	指月慈光
惠心常照	一醒妙夢	蘊空慧觀	研心玲鏡	壽光妙宗
虛雲妙浮	雲樓良鶴	慧鏡空照	鑑江照月	覺相妙本
一葉妙芳	柏葉全貞	柏心貞宗		

第四 童男女

春夢 含光 芳林 青春 芳心 曉雲 英春 孤明
 詠俊 梢花 玉露 慧光 瑤玉 達道 一法 蓮芳
 瑤貫 觀蓉 玉黃雲 彩雲 黃樹 觀智 觀相 宗珠
 露光 亮真 妙高 一應 慶隣 陽林 知幻 如影
 露瑤 水漚 柏零 芳心 霜路 幽山 良覺 菊英
 露香 幻露 乾外 霜輪 善修 善法 幻英 桂岩
 冷藥 幻松 道香 春容 良薰 了心 真相 一陽
 沈影 琬露 玉光 觀相 鏡明 夏山 本英 實心
 幻流 桃林 智線 觀性 善方 玄路 淨心 妙真
 惠璋 穉幻 俊明 荷香 貞順 如秋 知秋 翠林

素幻 秋明 淨雲 樹陰 涼月 白雲 青山 淨然
 如幻 素泡 茂林 源秀 寂如 卓道 幻旨 頓了
 清蓉 曉智 眞法 湛如 乘山 貞祥 妙璨 皓月
 柳影 智明 素耀 泰中 韜光 智賢 自觀 禪明
 良仙 妙空 玉輪 曹流 良珠 功山 蓉臺 梅香
 教參 知葉 如山 清窓 曉月 春禪 梅影 普峰
 貞珊 瑚榮 智泡 密山 全夢 春意 梅藥 古岳
 輝峰 靜安 騰雲 全眞 一麟 眞戒 機參 修心
 綠芳 融光 如海 慧忍 證道 慧鏡 雪庭 寒庭
 清好 蘭山 曉巖 芳權 蘆白 蒼潭 玉英 窈顏
 淨圓 孤天 澗雲 葬道 眞龍 誠證 覺入 哲心
 庭柏 本還 形山 惠山 超道 滴水 仙桂 覺春

素纖	靈珠	寒松	靈觀	圭潤	孝順	眉山	一竿
白鳳	天椿	盈月	孤光	慶福	曉星	放牛	牧牛
彩雲	端月	千江	歸真	妙鶴	牧仙	涓滴	鐵巖
岫雲	智傳	吟露	絕方	寂柳	謙光	泰庵	大霖
冷雲	青松	一休	太寰	正眼	禪嶺	桂岑	隆榮
來山	即明	鐵輪	妍玉	壺仙	瑞麟	槐天	徹成
密傳	惺夢	法運	理岳	退真	讓心	衝天	菊馨
彈應	良喚	德定	溪心	秋巔	祖林	密音	綠楊
曦光	慈影	宗珍	一光	水牛	芳草	靈輝	點明
雨江	古博	春光	向善	黃梅	清風	直道	一來
檀香	澹烟	機用	正令	寸松	自成	玉立	華藏
寸苗	龍鳳	栽松	擔鋤	涼蔭	無位	一葉	一如

秋密	智水	妙量	兩莖	興國	真面	啼禽	松門
聽香	大聚	吹葉	臘梅	南薰	虛舟	錦麟	香苔
載月	補宗	說禪	竹禪	吟風	一恩	繡線	樓月
金針	寶立	紫明	蘿月	隨流	乳峰	惠風	吐真
雙桂	吐香	妙來	全身	湘南	潭光	異苗	椿山
燭慧	茂繁	呵風	無則	長舌	吐空	一茅	百艸
新豐	向西	不藏	蘆花	刻舷	知恩	東陽	分明
汀洲	陽關	孤松	濟北	効古	自知	亦光	無端
刀耕	舶望	少林	忘所	訪天	搖空	雛鳳	玉鷄
一團	遼天	竹洞	紫谿	象中	聽秋	萬之	揚眉
彩鳳	當軒	隨綠	衣田	一聞	枯藤	單丁	幽意
枕石	長連	芳春	耕牛	久得	明邊	算海	一色

玉胎	無憂	猶存	與月	轉武	栖鳳	一清	掛針	妙唱	古光	良久	懸崖
素蚌	參方	鋪錦	青宇	蒼岷	性海	了相	龍潭	冲天	懸空	鏡來	蝶夢
同生	菱花	更參	百南	回岸	冷秋	作船	慶快	巢月	秘形	重言	洞然
為隣	春波	要到	威音	等來	栽竹	再來	琅玕	可憐	桂月	善哉	珠簾
勝年	騰身	猶可	大卷	蓬瀛	釣龍	忘懷	駐筆	掬水	卓錫	齊兮	開花
全由	赤心	小紅	推輪	善財	覺寒	一拳	玉開	蹤由	削玉	畫橋	大沈
仙明	周武	面南	成鏡	寒汀	冷江	立秋	月前	草青	現毛	一江	明白
忍應	橘黃	城南	毫光	妙足	玉中	葦航	三餘	攢峰	寒角	藕絲	威徹

露堂	光來	古柏	英修	蓬萊	聽松	妙茂	蘭汀	和敬	吟峰	華鮮	菊露
仙芳	暮雲	幽蘭	靈玄	如空	陽春	同遊	金陵	靈性	壽山	惠薰	慈光
可睡	如秋	夢澤	天樹	天算	高月	遂空	宜哉	一相	護心	月華	仙窓
柏樹	新涼	留春	承露	華生	看竹	念法	和光	一安	福田	餘芳	為隣
正信	成蹊	華雨	默霆	微笑	蕉心	克終	不味	清鑑	閒林	妙珠	清庭
浦仙	圓照	風騷	玉溫	獅音	幽跡	雪庭	一玄	素鳳	妙證	妙薰	智鏡
寶蓋	曙星	錦繡	臘雪	春眠	寶月	無絃	隣光	霜林	斷習	天心	妙喜
紫蓬	峙鼎	紫光	梵音	嫩馨	寵光	所光	海晏	了悟	惠潤	惠順	自定

偈頌文疏作法要畧

目次

序言……………一

道號頌……………三

首座賀偈……………五

轉法輪賀偈……………八

四六文作法……………九

 獨句四製……………一〇

 短對三製……………一二

 隔對六體……………一六

疏法……………二一

疏體並疏語……………二三

晋山開堂疏……………二三

山門疏式圖並作例……………二三

諸山疏式圖並作例……………二六

江湖疏式圖並作例……………二八

山門疏、同門疏、道舊疏作例……………三〇

弔祭追薦疏作例……………三四

佛事香語……………三七

下炬香語圖……………三八

小拈香……………四三

祭文……………四五

祭文式圖並作例……………四七

偈頌文疏作法要畧

序言

禪門の文字は、日本高僧の假名法語の類を除いては、悉く韻語と四六文である。列祖の廣録中の語録體の文と雖も、多くは四六文の句調であつて、純粹なる古文即ち散文なるものは極めて少ない。まして法式に用うる所の、謂ゆる「唱ひもの」に至つては、悉く韻語と四六文である。それ故に是等の作法の一斑を心得て置かなくては、たとひ古人の作を朗讀するにしても、その句讀訓點等が明晰ならず、聽者をして慊焉たらしむ。因て初學の爲めに其一斑を解説しやう。

韻語とは、祭文又は偈頌の類で、偈頌は、其形式は普通の漢詩と

同一て、近體と古體との二種がある。近體とは、五言、七言等の絶句と、五言、七言の律體を謂ひ、古體とは、長句、短句錯綜して成るものを謂ふ。是等は皆平仄韻字を踏んで成るものであるから韻語と謂ふ。その平仄韻字の用方は、普通の漢詩と同一であるから、今は略して之を説かぬ。只年中多く用うる所の拈香法語、首座の賀偈、轉法輪の賀偈等に就て、近古一種の弊習があるから、その誤謬を正して改めねばならぬ。

拈香法語にせよ、賀偈にせよ、其人の住所、即ち山號、寺號、又は其人の號、名等を偈頌中に拈用することがある。これは餘程巧手てなくては出来ぬものである。しかるに近古禪門の作者は、多く誤らず、文字を濫用して、音に韻致を損するのみならず、支離滅裂し

て殆と解すべからざるものを綴り、以て自ら得たりと爲すの風がある。是れは太だ誤つたことで、古の作者は決して斯様なことはない。但し道號の頌と稱するものがあつて、是れは師家が門人弟子等に道號を授けるに際して、その號の意味を頌中に讀み込んで作り、之を其人の訓誡として與ふのである。けれども是れは道號の文字を露骨に用ひず、一頌の中に隱然と知ることの出来るやうに作つてある。拈香法語、秉炬香語等にも此種の作法を用ひたものは多くある。今、古人作例の二三を擧げて之を證明しやう。

道號頌

○松 岩
 亭亭千尺拂雲青。雪後始知持節貞。更不懸崖重撒手。

偈頌文疏作法要略

風聲認作雨聲聽。

この第一句は松樹の高きことを云ひ、第二句は其節操の堅きを云うたもの、第三句の懸崖の二字で岩の字を云ひ、第四句に至つて風聲雨聲の字を用ひ、松の字を結んだものである。二十八字中松岩の二字を點出せずして、松岩の意を以て、修行上の訓誡を示したものである。

○瑤海

龍宮藏裡夜明珠。窮底到時何所無。試看風休浪恬處。

團團壁月上珊瑚。

この第一句の龍宮は海底に在るを以て海を云ひ、夜明珠の三字で瑤を云つて、第三句の窮底の二字も海に關し、何所無の三字は夜明珠に關す。第三句の風休浪恬は海に關し、第四句の團團壁月、珊瑚は

絶海

皆瑤に關して居るが、前首と同じく、瑤海の字面を點出せずして、他の文字を用ひて、瑤海の意を頌してある。

首座賀偈

○詠梅賀梅首座

默應

彈壓千紅萬紫枝。清癯骨格是生涯。心花開發半窓曉。摸寫破顏微笑姿。

こは詠物體と稱して、首座の名が梅であるところから、梅花に寄せて賀頌の意を表したものである。第一句は梅の萬木に魁して花さくことを云ひ、第二句は梅の清高瘦癯の風格を云ひ、第三第四は、其花が開いて影が窓に映じた處は、恰も釋尊が拈華瞬目せられた時、第一座の迦葉尊者が破顏微笑せられた姿のやうであると結んだので

ある。迦葉尊者は清癯の骨格であり、且つ釋尊が半座を分けて坐せしめられたこともあるので、この第二句の清癯骨格、第三句の半窓等の字面が頗るキイテ居る。二十八字中梅花を點出せずして、句句悉く梅花を離れず、純然たる詠梅の作であるが、たゞ心花開發、破顔微笑の八字がある爲めに、普通詠梅の詩に同じからずして、道人の偈頌たることを顯して居る。これは固より一體であつて、賀偈は必ずしも詠物體で無くてはならぬといふことは無い。其人の經歷等に由つて賀頌するものもある。

○賞周觀首座

默應

無涉川兮無出嶺。默然端坐自家牀。不往西天好消息。摸來昔日謝三郎。

これは故事を用ひて當人の經歷を叙しながら賀頌したものである。

玄沙宗一大師の俗姓は謝であるより謝三郎と稱す。師曾て雪峯義存の下に參禪すること多年。一旦四方に行脚遍參せんとして、飛猿嶺を踰えんとして巖に躓き脚を傷けて血出づ、自ら省み、痛み那裏よりか生ずと、豁然として大悟して「達磨不來唐土。二祖不往西天」と叫び、雪峰に返つて、復び諸方に遍參せずといふ。この周觀といふ首座は、沈黙寡言の人で、最初剃度した寺にばかり安居して、少しも諸方の叢林に遍參したことは無い人であつたが、時到つて一會の首座に任せられたので「川を渉ること無く嶺を出ること無く、默然として端座す自家の牀」と云ひ、而して首座に任せられた趣は、恰も玄沙大師が「達磨東土に來らず、二祖西天に往かず」と云つて、大事を發明せられたと似て居ると云ふので、第三句に「不往西天の好消息」といひ、第四句に「摸し來る昔日の謝三郎」と結んで、賀

頌を表したものである。斯様な作は實に巧妙なものであつて、普通の作者には出来かねるけれども、且く一例として掲げたまで、あるが、兎に角偈頌の作法等を心得るには、先賢の作例を見るが肝要である。

轉法輪賀偈

○詠^{ツテ}竹^チ賀^ス某^ス初轉法輪^チ

默^ス應^ス

多福庭前竹一叢。曲斜依位翠煙濃。三冬實富樓鸞鳳。飲啄十分鑿德風。

これも詠物體の七言絶句で、故事を用ひて賀頌を表したものである。「僧、多福に問ふ、如何なるか是れ多福一叢の竹。福曰く。一莖兩莖は斜なり。僧云く、學人不會。福曰く、三莖四莖は曲れり」とある。

る公案を用ひ、三四の兩句に於て、四方より幾多の雲衲が集りて、冬期九句の間、無事安穩に眠食して辨通が出来、一同みな其徳風に感謝して居ると、賀頌したものである。

この外に律體又は古體のものもあれども、大體は右の作例に異ならず。要するに徒らに其人の號名、住所等の名字を臚列するのみにて、何等の意味なく、何等の韻致なきものを綴りて、互に贈答するは、愚の甚しきことなれば、この弊習を一洗して、古賢の作例の如く作るべきである。

四六文作法

賀偈に次いで尤も多く用らるゝものは、小佛事即ち尋常の拈香法語では、是れは多く七言絶句にて、その作法も簡短であるから、暫

く略して、疏、秉炬、祭文等の作法等に就て少しく説明を試みやう。是等の作法に就ては、是非とも四六文の體裁を説明するの必要あれば、大顛の『四六文章圖』を抄出して、大略を示さう。四六文を成すには、十三法といふものがある。即ち獨句四製、短對三製、隔對六體である。

(一) 獨句四製

獨句といふのは、單獨の句といふことにて、對句に棟んで名けたものであるが、一に發句、二に傍句、三に漫句、四に送句、これを獨句の四製といふ。文章の最初に於て、大抵は發句とは發端の句といふこととて、文章の最初にある句で、大抵は對句でなくして獨句であるか、自然に對句を用うることもある。これは一字より四字に至る。

夫以。原夫。於是。方今。竊以。伏以。
蓋聞。于時。伏觀。歸去來兮。汝當知。

等の類であるが、必ずしも以上の句に限るのではない。或は短對隔對の句を用うることもある。

傍句とは句中に用うる句で、これも獨句であつて、對を用ひず、又韻を用ひず、一字より五字に至る。

斯廼。然而。是猶。將又。誠是。何必。
可謂。就中。於越。於茲乎。于粵。抑。

等の類である。

漫句とは句中に用うることもあり、或は首に用ひ、又は尾に用うることもある。字數は、凡そ六字より十餘字に至る。皆獨句で、對韻、平仄等を用ひず。しかし自然に韻に叶ふのは決して妨げない。

送句は文の尾に用うる句で、一字より三字に至る。これ亦韻、
を用ひずと雖も、自然に叶ふものは妨げない。例へば、
而已。哉也。孰甚焉。爲之記。之有。
何也。何哉。

(二) 短對三製

短對とは、簡短なる對句といふこととて、隔對等に對して直對といふ。一に壯句、二に緊句、三に長句、これを短對の三製といふ。
壯句とは、句調を壯大ならしむる對句で、平仄を調へた三字句である。例へば、

微霰零。
密雪下。

文有流。
學有海。

等の類であるが、平仄の調方は、前後轉換して、全く反對になしても妨げぬ。此に掲げた例句の平仄は、

○●○
●○●

であるが、之を反對にして、

●○●
○●○

となしてもよい。その○は平、●は仄の符號で、●は平仄何れにても妨げざる符號である。以下皆この符號を以て圖解を説明する。

緊句とは、句調を緊縮ならしむる爲めに用うる句で、四字句の平仄を調へた對句である。例へば、

三陽交泰。

萬彙敷榮。

押韻の文は、只平仄のみでなく、韻字をも調へねばならぬ。

(三) 隔對六體

隔對とは、短對に揀んで云へば、長對と謂ふべきものであるが、これは句を隔て對偶をなして居るから名けたものである。これに六體ある。一に輕隔句、二に重隔句、三に疎隔句、四に密隔句、五に平隔句、六に離隔句である。

輕隔句は、上は四字にて、下は六字の二句一連の對句を云ふ。この上の四字と下の六字と連つて、一句の意を顯すところから、四六文といふ名稱も起つたのである。例へば、

法燈之照。 騰百代而彌明。

慧月之光。

至七葉而增色。

の類である。この圖に示すが如く、只句末の一字のみ平仄を調へるので、餘は平仄を問はぬ。第一句の末が仄であれば、第二第三の句末は平で、第四の句末を仄にするのである。しかし只一格を示したもので、之を轉換して、

舌覆大千。 入語言之三昧。
身分刹海。 爲遊戲之神遊。

となしてもよい。この轉換は以下の五體みな同一である。この隔對は、上は四字で、下が六字で、上が軽いから輕隔句といふたのである。重隔句は、上は六字、下は四字で、前と全く反對であるから、重

山門疏は、境致、師承、權舉、唱法、祝語
 諸山疏は、師承、權舉、唱法、隣好、祝語
 境致は、其寺の境致、師承は、其人の道統、學歷、權舉、唱法は、
 其人の機用を稱賛する、祝語は、其人に祝聖、開堂を勸むることと
 ある。山門疏は、請聘を主とするから、首めに其寺山門の境致を叙
 し、師承、權舉、唱法等次第に叙し、祝語を以て結ぶのである。諸
 山疏は、慶賀を主とするから、直に師承を叙し、次に權舉、唱法を
 叙し、次に隣好、即ち同格の門地に在る人であるから、互に交誼を
 好くする上から、その晋山、開堂を勸むる意を叙し、終りに祝語を
 以て結ぶのである。前者は境致があり、後者には隣好がある、これ
 が兩者の異なる所である。若しそれ江湖、同門、道舊の諸疏は、大
 抵同一に慶賀、勸奨の意を叙するのである。

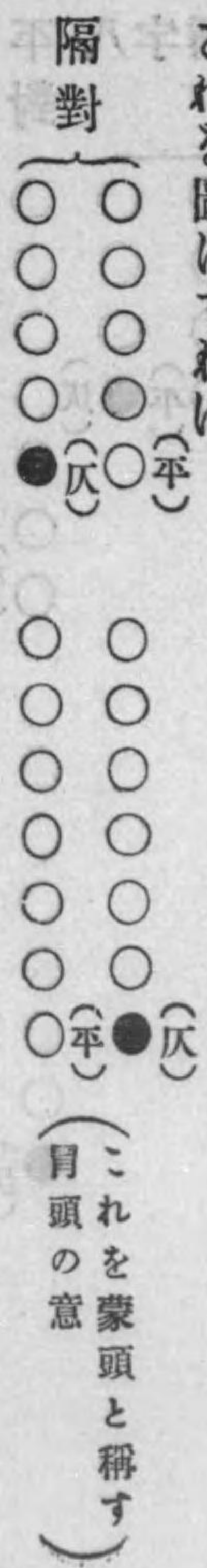
疏の體裁、并に疏語の長短、多少は、固より一定しては居らぬが、
 先づ初めに散文の小序を書き次に上に陳べたる隔對、直對の語句を
 參差交錯して、一篇を成すのである。小序の例は後に示すこととし
 て、先づ四六の一例を擧ぐれば左の如し。

(一) 疏體并疏語

(二) 晋山開堂疏

- 一、隔對。二、平對。(直對) 三、八字稱。四、隔對。
- 五、平對。六、隔對。七、平對。

これを圖にすれば、



平對 ○○○○(平)
 稱字八 ○○○○(平) ●○○○(仄)
 隔對 ○○○○(平) ●○○○(仄)
 平對 ○○○○(平)
 隔對 ○○○○(平) ●○○○(仄)
 平對 ○○○○(平)
 隔對 ○○○○(平) ●○○○(仄)
 平對 ○○○○(平) ●○○○(仄)

(平仄、の印ある外は平仄何れにても可し)
 (これを過句と稱す)
 (これを襲句と稱す)
 (これを結句と稱す)

蒙頭は、山門疏ならば其寺の境致を叙するのである。八字稱といふは、其人の徳を讃頌し、又は其師承を叙するのであるが、多くは

四言の對句一連を以てするから、八字稱と唱ふるけれども、必ずしも八字には限らぬ。結語は、祝語である。この圖の作例は左の如し。

三百六十岩。
 八萬四千偈。
 把茅在南山之陽。
 自少行脚。
 如新發硎。
 踏折斷橋。
 踢翻介石。
 眼明廬阜之諸峰。
 吸乾左蠡。

○ 劔門住能仁。
 受天地至清之氣。
 發口耳不到之機。
 主人來西湖之上。

○ 璨 無文

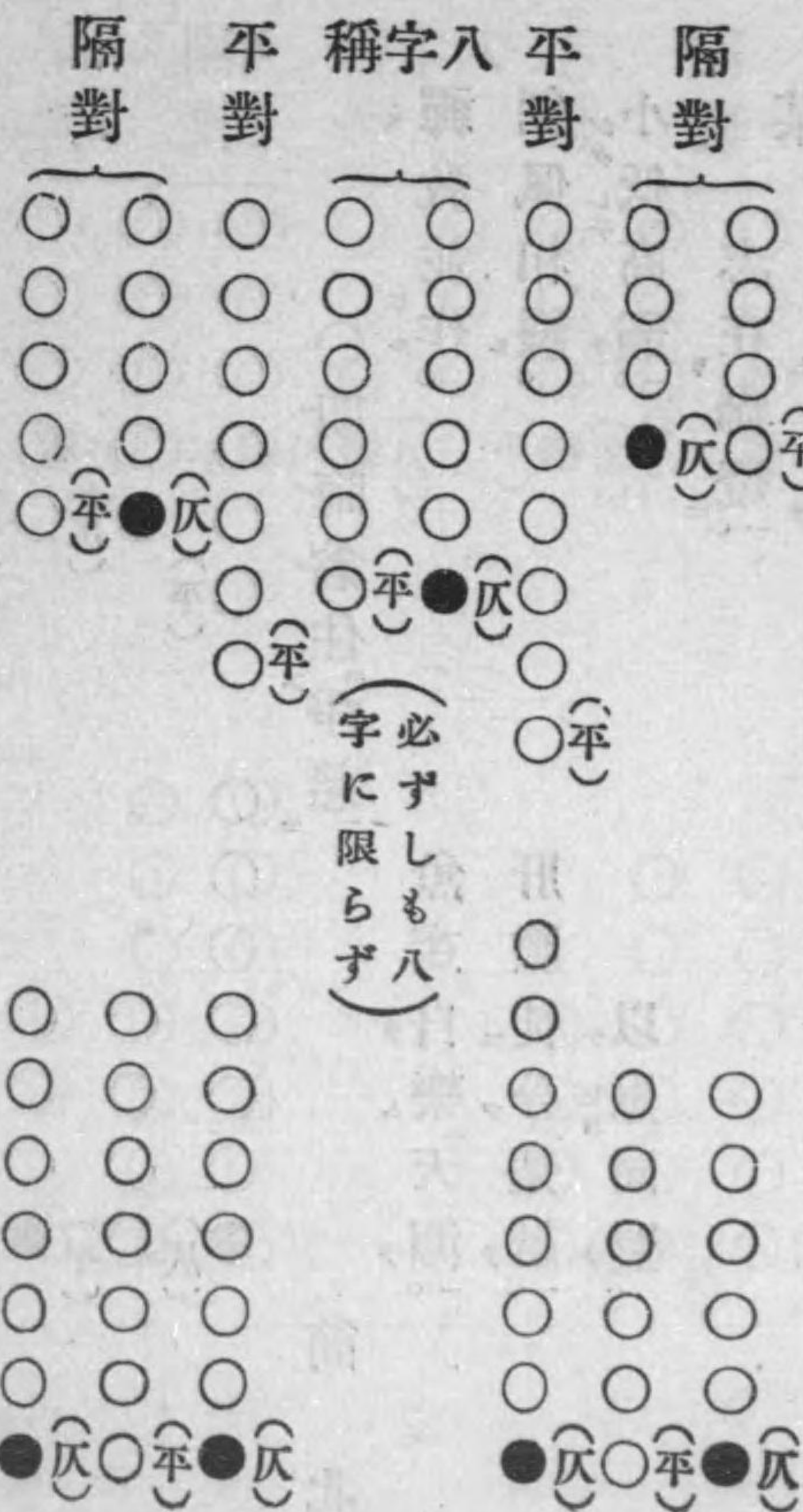
○ 喪却赤窮性命。
 悟得向上機輪。
 面帶延平之秋色。
 盡收透網金鱗。

偈頌文疏作法要略

老圃澹秋容。
隣燭分餘照。

更持晚節。
竚望強宗。
免唇亡齒寒之歎。

○江湖疏式圖并に作例



○雲耕位報恩。

璨無文

大江以東。
中峯直子。
清廟朱紘必有遺音。
某 皎若玉峯之立。
淵乎古井之深。
同宿覺一處生緣。
首座已行脚。

叢林不堪着眼。
此郎乃可起家。
大冶精金應無變色。
受滅翁十分印證。
如靈樹之有雲門。

偈頌文疏作法要略

侍者參得禪。

當一老掩光之後。

古洞花開。

長庚路冷。

珍重茲行。

○山門疏

萬年山相國承天禪寺。山門欽奉。今上皇帝聖旨。

敦請前席等持獨園禪師。轉位本寺。今也再住持。

爲國開堂演法。祝延皇國萬安者。右必以。(以上小序)

承天住持。蚤發道苗。增晃華。佛日風規。曾洗塵穢。啓

昏塞。朗耀心德。旌表四衆具瞻。建立法幢。振起列

祖玄旨。共惟。新命本寺堂頭獨園和尚大禪師。儀形

猶東山之有圓悟。

豈諸公袖手之時。

母共劉老深隱。

合念先師此言。

大旨。金莫負所學。

嶽峙。慧學淵深。扶豎空谷已墜綱。賴有此老。提持
夢窓直指印。今見其人。諦觀空假中於真淨界。布演
漸頓圓於選佛場。暮山紫煙光凝。三句顧鑑。殘星白
曉月冷。五逆聞雷。願及斯文之未喪。須放優曇之馨
香。黃檗行棒。臨濟行喝。接誘群機。召夷爲保。周
旦爲師。翼贊皇化。謹疏。

某年月日。知事比丘。頭首比丘。勤舊比丘等。
これは小序のある疏の一例である。邦人の作には多くこの序がある。
この序によつて、山門、諸山、同門等の區別が、一見判然すること
であるから、序の有る方がよいやうに思はれる。

○同門疏

茲諭。前席等持獨園法兄禪師。向榮膺。皇朝

明選。轉位萬年山相國承天禪寺。乃今再受衆請開法。於是瓜瓞于法系者。聞斯盛事。不勝忻抃。輯詞製疏。以伸賀忱云。

正覺道場。躡千輪於雙趺下。普賢世界。融萬象於瞬目間。蚤成就寶階戶。須豁開解脫門。共惟。新命相國獨園法兄大禪師。獨園喬樹。空谷珍材。大拙附與閒田地。深養靈根。佛日發暉。鉅禪林。常照癡暗。智慧功德。齊是莊嚴。住持事業。咸言圓滿。金剛圈栗棘蓬。豈同不變不遷。若虛體。山花笑野鳥語。總括離摸離樣。承天機。以爲溫故知新百行師。勿惜呵風罵雨一張口。優曇現瑞。思之在之。眞淨域元無自無他。孰漏法需。光明藏互作主伴。益固宗盟。

明治三年星宿庚午秋九月日疏。

現天龍周岳 前天龍元瑜 前圓覺道恭。某。某。

これは平仄少しく常格に違ふ所があるけれども、形式は格法に合して居るから、暫く一例として掲げて置く。

○道舊疏

默 應

武陵州世田谷大谿山豪德寺虛主席。請攝退藏峰雪巖禪師。禪師不獲止起。乃以今月良辰。晉院開堂。某嘗辱交誼。遙聞此盛舉。不堪欣抃。緝詞裁疏。以伸厥賀。

山目大谿。由來武陵法窟。寺號豪德。實是英檀福場。苟非擇彼間世之偉才。安能酬此護法之恩庇。恭惟。新盟白堂雪巖大和尚。

寶林拔萃。雲楠孤標。宇治川上截流先登。龍海會中分
 坐說法。爪牙猛如虎。眼目俊似鷹。是故。泛一葦於河
 內也。無邊風月眼中明。卓孤錫於洛西也。不盡乾坤燈
 外熾。耕破不萌地。泥牛吼退藏雲。拽回不動機。木馬
 嘯永井月。事理圓融。宗說兼通。加之。適天命維新之
 運。誰膺禪風復古之仁。竿木隨身。攪玉川作酥酪。關
 板在手。變碧雲為黃金。請速拈一瓣。以高祝九重。
 維明治三年龍舍庚午某月穀旦。同盟住浪北清涼山心
 月院乞士默應。稽首拜疏。

(三) 弔祭追薦疏

弔祭追薦の疏も、その體裁は、慶賀の疏と同様であるが、今一例
 を擧ぐれば左の如きである。

○永澤開山通幻禪師五百回忌疏 默 應

淨法界身。本無出沒。大悲願力。示現去來。
 南閻浮提大日本帝國攝丹境。青原山永澤寺燒香比
 丘某等。某年某月某日。恭值開祖古佛大和尚禪師
 五百回大遠諱。特開尸羅場。修諸般白業。此日謹
 設菲薄之奠。諷誦大佛頂萬行首楞嚴神咒。以酬罔
 極慈恩者也。右伏惟。

降神豐域。靈光早射斗南。
 掛錫大乘。勝幢已翻加北。
 坐斷峩山絕頂。豁開總持玄關。
 於是

英壇插草建活伽藍。神龍稟戒得大解脫。

活埋坑裡。

撞入無氣息人。

枯木堂前。

燒却有學解漢。

勅黃特作洞上僧錄。

禪緇忽為天下叢林。

門庭嚴森。

四處瑞松垂蔭。

鉗鎚辛辣。

十員鐵額放光。

仰想凜凜威風。

俯感洋洋慈德。

茲遇半千遠諱。

兼開三聚戒場。

供以黍稷之餐。

薦以蘋蘩之菜。

伏願。

華藏界中分身周遍。

珠網殿上萬象森羅。

維明治某年某月某日燒香比丘某等謹疏。

以上は只一例を示したのであつて、疏の體裁は必ずしも、この例

に限らぬ、しかし平仄の用方は殆ど此の例に示した通りであつて、對句の排列は如何に變化しても、同一であつて、少しも變りはない。但往往韻を押しして作る者がある、これは古人には例が少くない。思ふに今人が秉炬香語も同一視して、疏にも韻を押しやうになつたのではあるまいか。兎に角疏は韻を押しに及ばず、只句末の處に平仄を交代に用ひ、即ち平仄仄平、平仄、仄平、平仄仄平、又は仄平平仄、仄平、平仄、仄平平仄といふ工合に用ひて句を成し、輕、重隔對、平、雜等の對句を程能く排列するまでよい。

佛事香語

佛事に種種あり。鎖龕、掛眞、起龕、奠湯、奠茶、下炬（又は掩土）、念誦、之を七佛事と謂ふ。或は取骨、安骨を加へて、九佛事と

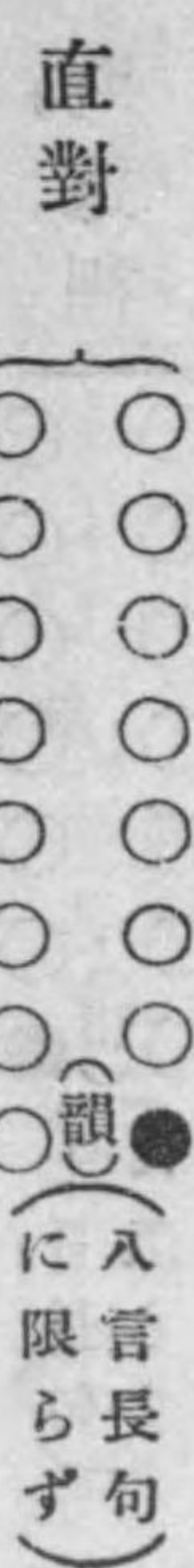
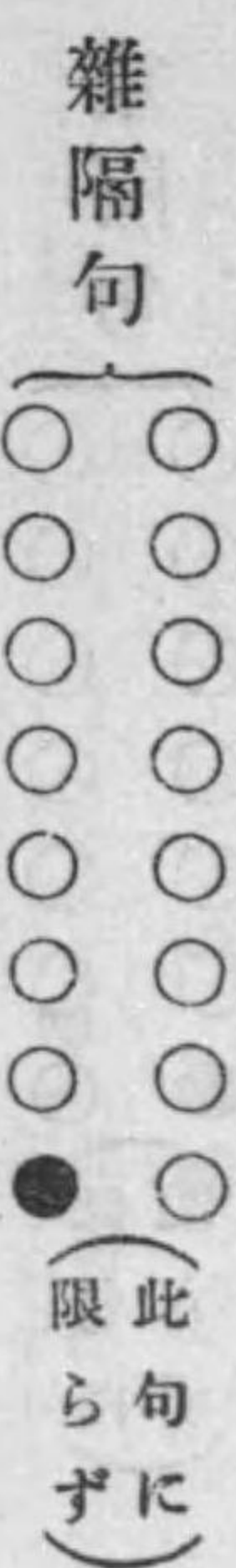
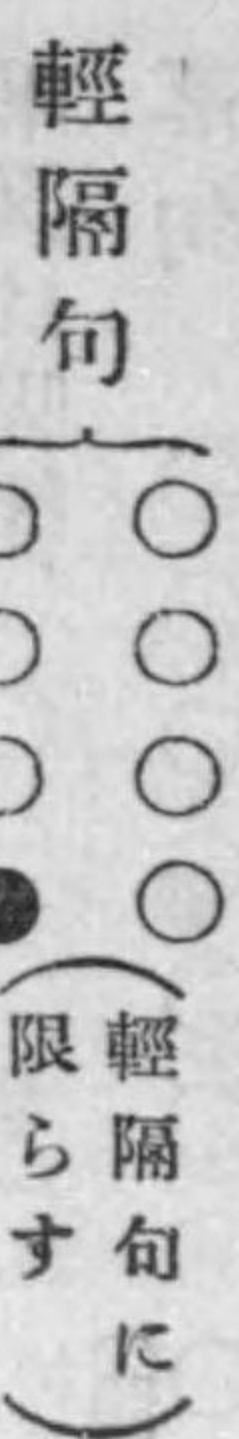
稱し、或は鎖龕、掛眞、取骨、安骨を減じて、五佛事と稱し、或は鎖龕、掛眞、起龕、念誦、取骨、安骨を減じて、三佛事と稱す。其作法も、散文、四六文、韻語等ありて、固より一定して居ないけれども、普通は韻語を以てすることになつて居る。大體は疏と同じであるが、疏は四六文で多く韻を押さず、此種の香語は多く韻を押した四六文であるのみならず、蒙頭に四、五、七言等絶句の頌を置き、次に八字稱を置き、次に輕、重の隔對、或は疎、密の隔句、或は平、雜の對句等を随意に用ひ、次に散文を用ひ、次に、咄、喝、露、響、嘆、參等の一字關を用ひ、終に落句を以て結ぶのである。或は落句の後に一字關を用ふ。

(一) 下炬香語圖

(其一)



(此れは平起の格にて、平仄は必ず此圖の如くす)



偈頌文疏作法要略

散文 (字數多少定まらず但末字に韻を用ふ)

落句 ○○○○○○ (韻) (四五七言二句隨意) (多くは古語を用ふ)

一字關 (咄又は喝)

(其三)

頌



(此れは仄起格なり)

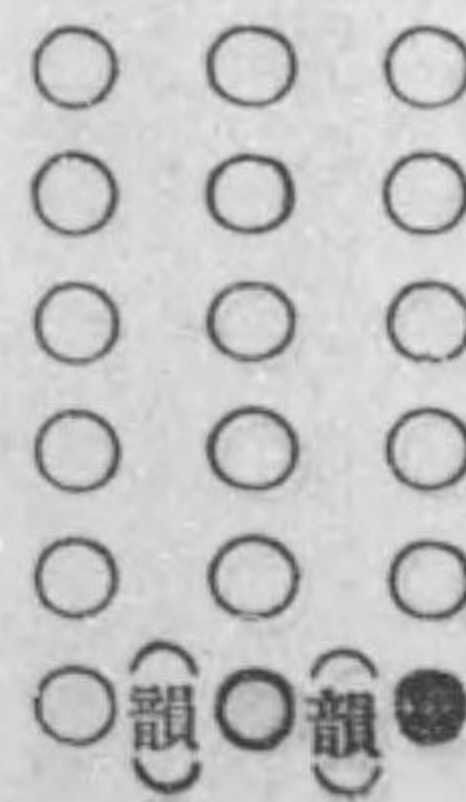
八字稱



輕隔句



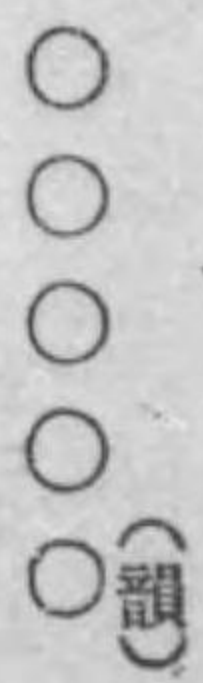
直對



到這裡 ○○○○○○ (此句に限らず)

落句 ○○○○○○ (韻) (四五七言二句隨意) (多くは古語を用ふ)

一字關 (露又は聾等)



以上は最も普通に行はるゝ所の圖例を示したまで、必ずしも此圖に限らぬ。鎖龕。起龕、奠茶、奠湯、掛眞、取骨、安骨等の香語も、只その内容の異なるのみにて、其形式は殆ど同一であるから、此圖例に依て作ればよい。

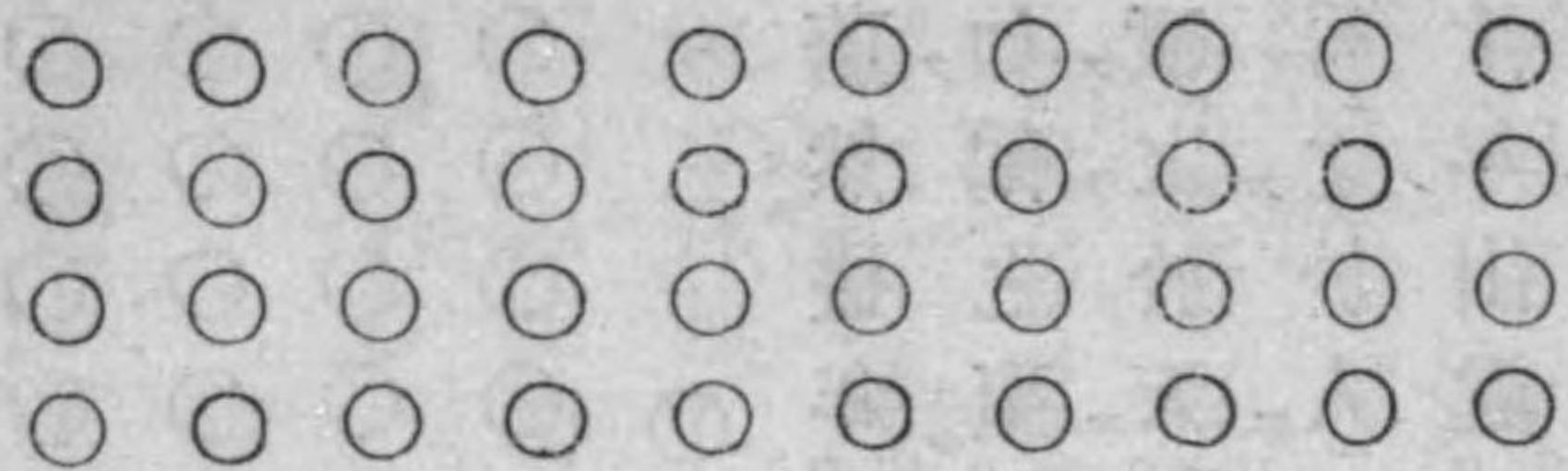
(二) 小拈香

小拈香は、尊宿、在家士女の追弔供養の際に唱ふる香語にて、此體も亦自ら二種あり。一は、始めに五言、若くは七言絶句の頌を唱ひ、次に散文の序にて緣由を叙し、次に喝、又は咄等の一字關を唱ひ、終に落句即ち、直對一連の古語、又は絶句の轉結二句を唱ふ。

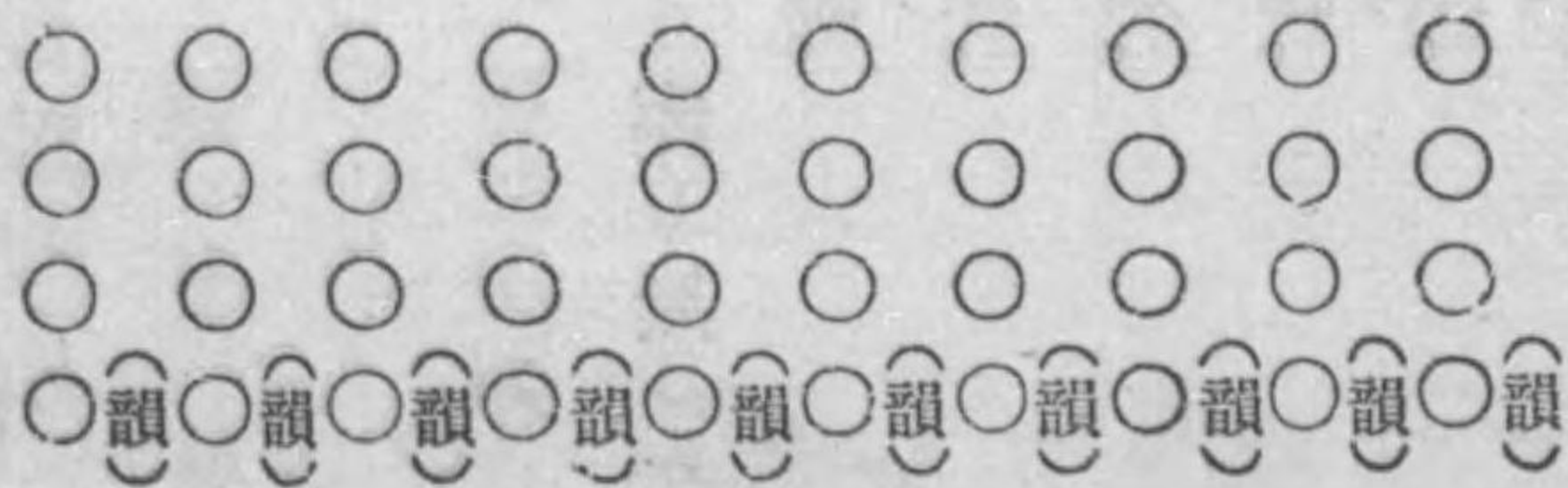
爲す」等の語を以て結ぶのである。全體「文」といふは、諸種ある文章中の一體であつて、韻を押すのであるから、作り難いものである。和漢名家の文集の中にも、「祭文」「辭」「賦」は、數篇が收めてあるのみである。近來は「祝文」とか「祭文」とか「弔辭」とかいふことが、非常に流行するので、文章の何物たることをも知らぬ輩が、みだりに文字を臚列して、自己の思想を陳べ、それで「祭文」「祝文」「弔辭」と稱して居るので、文體といふものが、メチャ／＼に壞れて居る。しかし何も必ずしも漢文の形式に拘泥せずともよいといへば、それまでであるが、吉凶慶弔は、各禮儀のあるもので、其時に用ふる文詞は、自ら莊重典雅であらねばならぬ。それであるからたとヒ押韻の四言、又は四六の漢文でなくとも、少なくとも對句の文章位には作つて欲しい。今式圖並に古人の作例一二を掲げて參考に

供す。

○祭文式圖



上の句は韻を押さずともよい。且つ平仄を調ふるとをも要せず。只下の句だけに韻を用ふ。韻は平韻仄韻いづれにてもよい。又句數の多少も隨意である。



偈頌文疏作法要略

○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○

○祭草堂文

蔚然盛年。
如鶴之羸。
賦之於天。
得之於人。
十年出處。
一襟才力。
半榻白雲。

○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○

○璨無文

偉然令器。
如驥之肆。
秋明春媚。
霜凌雪勵。
奮不贖蹟。
挫不敵銳。
四牕秋意。

與病對壘。
所喪者命。
所殞者身。
士生世間。
群以千百。
厄哉吾黨。
情之所鍾。

與死爲地。
不喪者氣。
不殞者志。
標準道誼。
得以一二。
失此善類。
云胡不祭。

これは序無し四言の祭文で、全體二十八句より成立つて居る。仄韻が用ひてあるが、前十二句は去聲四寘の韻で、後二句は去聲十卦の韻である。

○參學祭無準文

○觀物初

某年某月某日。徑山堂頭和尚佛鑑禪師計臨冷泉。江

漸湖淮。七閩二廣參學比丘。率長貝饌。馨爐淪茗。
 拜手稽首而奠。謹昭告之曰。
 東山之道。如日經天。五傳至師。愈大其傳。
 笑花眼活。掣電機旋。一音孤唱。衆音失妍。
 如聞天籟。如鼓天籟。直以此道。陳于帝前。
 帝曰兪哉。徽號賜旃。奎璧之華。照耀雲烟。
 沈沈萬間。冠冕絕巔。一再新之。丹明碧鮮。
 成於談笑。他人所難。四方望師。趙州齊年。
 合彼離此。咸有賴焉。孰謂象武。而不少延。
 龍湫月落。劔閣雲寒。楷模何在。我心惛惛。

これは序文のある四言押韻の祭文で、全篇三十二句、一先の平韻を用ひてある。この體が近古最も廣く行れたやうに見える。○印は韻

の符である。

○祭雲大虛文

璨無文

才不與氣合。不足以爲士。學不與道合。不足以爲士。
 具是四者。而欲得志於天下。離聖賢不能爲。蓋天之
 所必惡。人之所必忌也。大虛。負才高明。挾氣正大。
 始而博之以儒學。中而參之以聖教。終而約之以至道。
 故其發而爲文則渾而厚。變而爲詩則雅而正。溢而爲
 駢儷則華而滋。犯天之惡而不顧。取人之忌而不恤。
 是故住山雖榮。而不貸其苦。取名雖富。而不療其貧。
 涉世雖艱。而不緩其死。由是而言。食不知旨。大虛
 之鐘鼎也。衣不及完。大虛之文繡也。髮不及華。大
 虛之壽考也。士焉若此。可以爲士矣。峨峨中峰。翠

偈頌文疏作法要略

壓_ス江_湖。乃翁由_レ是_ニ。聲徹_シ九_天。道行_ハ四_海。大_虚居_ル之_ニ。
 不_レ數_月。而遽_ニ以_テ計_テ告_グ。曰_ヒ惡_ト曰_フ忌_ト。不_レ施_ニ於_レ乃翁_{。而獨}。
 施_ス於_レ大_虚。吾又未_ダ見_ニ天_人之_レ能_ク惡_ク能_ク忌_ム也。雖_レ然_レ能_ク貧_ニ大_虚。
 虚_之身_{。而}不_レ能_ク貧_ニ大_虚之_レ道_學。能_ク齊_ニ大_虚之_レ福_{。而}不_レ能_ク齊_ニ大_虚之_レ才_氣。能_ク天_ニ大_虚之_レ壽_{。而}不_レ能_ク天_ニ大_虚之_レ詩_文。翁_之而愈_レ張_{。抑}之_レ而愈_レ揚_{。吾}今_ニ而後_ニ知_ル。凡_レ爲_レ士_者。惟_レ恐_ニ天_之不_レ惡_{。人}之_レ不_レ忌_{。犯}惡_取忌_{。大}虚_之勝_天。勝_レ人_者。不_レ在_レ茲_乎。揚_ニ西_湖之_レ清_風。挹_ニ北_山之_レ爽_氣。繪_ニ大_虚於_レ斯_文。落_ニ遺_哀於_レ百_世。

これは散文ではあるが、句調が正しくして、いかにも能く情を盡くしてゐる。かやうな風に出来るならば、散文でも結構である。

此稿、初めは今少しく詳細に説明する考であつたが、編輯、刊行の
 期が切迫した爲めに、已むを得ず簡略したので、卑見を盡くすこと
 が出来ぬのは、甚だ遺憾であるが、大體はこんなものであるから、
 其餘は推察して作爲せられんことを望む。

編者識す

偈頌文疏作法要略(畢)

辭源支那辭書要綱(一)

其體裁詳述して予讀むるに益ありしを感ず。
此書出版の日、其式體裁了るは、大體訂入なるものがあるは、
其體裁了るは、其式體裁了るは、大體訂入なるものがあるは、
其體裁了るは、其式體裁了るは、大體訂入なるものがあるは、
其體裁了るは、其式體裁了るは、大體訂入なるものがあるは、

大正二年七月
日印刷
發行

(定價一圓三十錢)

不許
複製

編輯者 山田孝道

發行者 今立裕

印刷者 高桑基次

發行所

東京市神田區
駿河臺袋町一

光融館

電話本局二九九九番
振替東京三三一三番

東京市牛込區
市谷加賀町一丁目十二

(刷印會英秀社會式株)

R27J-64

會長 釋宗演禪師 主幹 鈴木大拙居士

月刊 禪道

每月一回五日發行
定價一部十二錢(送料一錢)
半ヶ年分金七十二錢(送料共)
一ヶ年分金壹圓卅錢(送料共)

主幹 山田孝道師

月刊 修養

每月一回八日發行
定價一部五錢五厘(送料五厘)
一ヶ年分金七十二錢(送料共)

新豐會編纂

通俗 曹洞宗講義錄

每月一回十日發行入會金參拾
錢一部定價五十錢三ヶ月分前
金壹圓拾錢半ヶ年分前金二圓
廿錢一ヶ年分前金四圓四十錢

終

